

# ミオヤの光 観音菩薩の巻

信仰の代表たる観音……………	一	信愛欲……………	二一
信と愛と欲……………	一	独尊……………	二四
信……………	六	信は感謝……………	二五
欲望……………	七	観音の本尊……………	二八
彌陀宗教の理想……………	八	品性……………	二〇
泥中の蓮……………	一〇	感化……………	三三
西藏佛教の観音……………	一二	観音の宇宙観人生観……………	三九
観世音を愛す……………	一三	観音靈格の要求……………	四一
観世音と菩薩……………	一四	愛の発達の順序……………	四三
佛衆生相念……………	一七	如來は愛の現はれ……………	四九
観音三十三身示現……………	二〇	如來は愛慕する者に現はる……………	五一

## 信仰の代表たる観音

最も圓滿なる理想の信仰心を表すは観音である。彌陀の光明を受けて法身理想の宗教心の（標）たるものである。通じて云はば初めて宗教の門に入つて終に大乘信仰の究竟なる正覺を得る迄の階級を通じて観音を以て表す。

彌陀の靈光によりて養成せられたる最も品性の高い理想は観音である。其觀音を理想として此血あり肉ある肉體を以て自己の宗教心を形成し實質を成じ靈の生活に入るものは即ち活ける觀音である。活ける觀音は理想を實現にする人格である。

## 信と愛と欲

太陽の光を外にしては月輪の明りはない。月は太陽の光を映寫す。彌陀の光明を離れて觀音の聖徳はない。觀音の人格に輝く聖徳は即ち彌陀の靈光である。

太陽の力は天に照近るも月輪がなければ光明を現はすことできぬ。彌陀の靈光は法界に徧照すとも、觀音の人格なければ示現ができぬ。彌陀と觀音の關係は相互に離れぬものである。

相互の關係はいかやうに結合されてあるかを三面より之を見む。

彌陀は聖子たる觀音を生産養成する聖意をかやうに示されてをる。

佛子よ、至心に我を信じ我を愛し我國に生れんと欲して一に念せよ、然る時即ち聖人に生れ更らん。

然らば即ち如來は已に萬德圓滿して聖子を養成なさる靈力に充みちてをる。聖子の徳を養成せんとするには至誠心でなければならぬ。

信とは如來は宇宙最尊第一の威神光明を以て觀音のやうな花のやうな光ある力ある圓滿な完全な品性の人格は如何にして形成せられたのであらう。その人格の實質内容はいかに豐饒でしやう。其光輝ある品性圓滿なる人格精神にかなる滋養分を攝取してをるでしやう。

寶冠にいたゞける寶石あらゆる寶の瓔珞眞珠また胸にかゝれる寶石眞珠等の瓔珞は其價千金、あらゆる品性人格を莊嚴せるすべての精神生活の豊富なる、理想の高尙なる、希望の遠大なる、實に雲中に光彩を放てる淨滿月の如きの人格である。其皎潔なる滿月の如くに輝く人格には其内（證）に太陽の如くに光明の原動力がなくてはならぬ。

觀音といふ靈的人格の背景には彌陀てふ太陽の靈格ありて其光明の反映を觀音に及ぼしてをる。

彌陀の太陽と觀音の關係には信と愛と欲とある。

觀音の心には彌陀を最尊第一なる威神光明者神聖なる靈者として彌陀を歸命信賴してをる。彌陀を絶対的本尊として奉戴してをる。すべてを献げて至心全幅を献げて彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌陀高く之を鑽れば益堅き如來を崇敬してをる。

宗教心。宗とは絶対的に尊き格に歸命信賴するのが宗教とすれば、實に觀音は無上の尊敬を以て彌陀を奉戴してをる。信心から瞻仰する時は實に彌陀は愈々高遠にして尊き格にまします。信心の本尊に對する信仰ほど客體を尊敬し崇拜して自己と彼の距離は非常に間隔をなしてをる。尊崇恭敬の信が進めばすゝむ程本尊が高く遠くあなたに崇めて頂禮する。

若し此尊崇恭敬の念が無ければ宗教心とはならぬ。

あなたを高く崇む程自己は卑下し謙遜す。

あなたの光明ます。明照せらるゝに、自己の罪惡であり卑劣なる物の數ならぬほどが感じらるゝ。自己が無知無力非靈罪惡なることを自覺するに従つて益々あなたの神聖最勝高遠無量の靈性を尊信する念が増長す。信は進むに従つて如來に無上の尊敬心が増してくる。

次に宗教心は一方に非常に高く遠く尊敬しながら其内容には反對に益々近く親しく彼此の間に毫も容る能はざる感情が起り來る。即ち是如來を愛する愛念である。彌陀はすべてに超えて觀音を愛す。觀音はまたすべてに超えて彌陀を愛樂す。

愛は彌増長するに従つて益々親近す。

信は畏敬尊崇の遠心力なり。愛は愛慕憶念の求心力なり。子は本母の胎内に於て養はれ生後には哺乳せられ掬養撫育せらるゝ如くに、觀音は彌陀の大慈悲に産出され掬養せられたる聖子である。觀音の靈的血肉も骨皮も悉く彌陀に養成せられたる聖子である。と云ふべきに實に麗はしき慈愛に富める其品性の最も高きは彌陀より養はれたる靈性である。故に觀音は彌陀より産出されたる聖子である。産出されたるのみならず養育せられたる法王子である。我らが日々現に靈は養はれつゝあるではないか。

信は歸命頂禮高く遠く恭敬する。愛は相互の間に於て増長すれば益々親近する性をもつてをる。

相互に結合する愛の情は實に溫暖である。熱血の通ふ交接をせんとして離れんとするも離るゝ能はざる結合である。母は自己の胎内より暫く分産したる兒に對して常に温々たる愛を注いでをる。温々とあたためてゐる。

愛  
子がまだ母より分産せらるゝ前には相互の間は愛情は起らぬ。彼と此と相待の中に於て常に離間せざらんとする愛である。子の愛は益々増長するに従つて愛情もまた増長して愛の状態が變する。初めは子が母を憶ふ如きの感情にて次には異性の間に於ける如くに愛心が（ ）する。

### 信

信は一方は如來の靈光に對して自己の無知無力を深く認めて如來を尊敬する時に、無上の尊敬心が益々高まるに従つて、其尊崇心に還つて自己の尊崇性を養成し陶冶せらるゝのである。如來を尊敬し、信心の進むのが自己金剛心の琢磨と成つて信心の金剛石が磨けて如來の靈光を映寫する光を放つ様になる。

高慢は自から偉大を氣取りて自ら擧高し他を輕侮し還つてそれが輕侮の念は自を輕くするに過ぎぬ。  
謙遜してあなたを尊崇する時は尊崇心は深く深くなりて自づと自己の尊崇性が深くなる。尊崇性が高く進みたる結果は自らが尊くなるなり。

### 欲 望 (彌陀に對する欲望)

永生、常住の平和、圓滿なる人格、我と人と共に永遠の安寧を得んとする欲望。  
圓滿なる人格の理想を願作佛心また願度衆生と云ふ。是は自ら佛子と云ふ完全圓滿なる人格を成じたと云ふ望み、また一方には世の人々を度したいとの欲み。  
人格を圓滿に形成するには有らゆる徳性を具備せねばならぬ。理想なる觀音は六根

常に清らかに光顔うるはし。

生の欲望は天性主義の人は排他の世俗情操と名譽財産等の世界動機にて非人格の三悪道人格的の三善道を形り道徳不定なり。生死より涅槃に回向して情操意志轉換し人格更生して願作佛心願度生心を以て如來の三徳に隨順す。

觀音の理想を吾が理想とし觀音の希望を以て我願望として觀音の生命を我生命として同じ慈父を戴く。

此意味にて觀音を信仰すること能はざるものは逆も高等なる宗教を理解することは出来ぬ味ふことも不可能である。

### 彌陀宗教の理想

高等なる宗教には、模範即ち信仰に依つて形成せられたる人格を要す。各宗の宗祖はそれであつて、何人も其宗に入りて道に進む時は宗祖を模範として宗祖の人格を理想として自分もまた宗祖の如くにならんとして向上するのである。

通じて大乘彌陀佛教の理想となる處觀音菩薩である。故に(一)佛教には觀音は彌陀の法王子即ち長子として彌陀の補處即ち世つぎである。この長子たる觀音が彌陀の子として父に養はれたる人格の充實せんとするすがたである。然れども何人も彌陀の聖意を信じ彌陀を父としてみだの恩寵に養はるゝものは矢張其同胞として長子たる觀音と同じく靈き生命となり靈き人格に養育せらるゝのである。我等も彌陀の慈悲に攝取靈化せられたる上には觀音と同一の資格となるのである。然れば觀音は我等が信仰の理想とする模範とする靈的人格の表相である。

活ける觀音と云ふ意味は元來觀音に對する觀念が種々の方面から信仰せられてを

今は觀音のいと高き獨りの父を念する者即ち如來の清められたる信仰家は人間中の白蓮花として最も心の清き人で、觀音は其人の勝れたる友と爲つて其人を愛護して離れ

ぬと示されてゐる。

如來に清められた人は觀音の友と云ふばかりでなく眞の同胞である。即ち生れたばかりの觀音である。同胞とすれば妹も矢張り觀音なのである。

### 泥中の蓮

蓮花の云ふものは元濁りの泥中より出ながらいかにも皎潔にして其色の鮮なる其香の馥ばしき、すべての花に勝れてをる。

元來凡夫の心は己が情に適すれば貪りを起し、意に違へば忽ちに怒り、または眼耳の欲のために常に心の汚れることは實に泥游よりも甚しい。此泥よりも汚れたる心ではあるが、宇宙間にすべてに超えて獨りきよき靈き如來を念じて、一らに我を擲ち如來の中に我が心が溶け入る時は、其きよき聖旨に我心も同化せられて自ら我心もきよくなる。其心狀こそ人中の白蓮である。

凡そ宇宙唯一のきよき如來の中に融化せられたる人の心情ばかり清き心はなからん。

其心の内容は觀音と同じことである。

觀世音は如來の慈愛に充されて、而してきよき心の花の開きなされし最も麗はしき心の聖者である。されば本々獨一の如來の靈によりて充された開かれたる心なれば觀音勢至は其友と爲ると示されたのである。

若し太陽なかりせば世界は闇黒である。

此肉眼にて見ゆる太陽の如く、宇宙には心眼を以て見ゆる方が實は廣大である。心眼にて觀する方を心靈界と名づく。此心靈界たる宇宙は太陽よりもつとく靈に偉大なり。靈の太陽が存在して靈の光明を以て一切の世界を照して在ります。此が即ち宗教にて最もすべてに超えて尊き無量光如來なのである。

靈的太陽なる如來の光明こそ一切衆生の精神を復活して靈に永遠に活かす處の靈力である。

太陽がなかりせば地上の一切生物は生存する事ができぬ如來の光明によらざれば人の心靈は永遠の生命に活きることができぬ。大乘佛教の教祖たる釋尊が最も熱血を注ぎて衆生に勧めなされたのは無量光如來を信じて如來の光明によりて靈に活きよ復活せよと。

あらゆる賢人聖者は悉く斯如來によりて靈に活き靈に復活して佛となり給うたのである。爾等も如來の光明に接觸して靈に活きよ、永遠の生命は之れら圓滿な人格たる佛と成ることを得べしと教へなされた。

### 西藏佛教の觀音

西藏佛教の傳ふる處によれば上界に在ます阿彌陀尊が禪三昧に入りて此下界に人佛の釋迦を應現し即ち淨飯王の子として世に出で衆生を教化し給ひ、のち靈は淨界の本佛に還り給ひ釋迦の遺法を護持せんか爲に法王子觀音を使はすと。

### 觀世音を愛す

私は深く觀世音を愛し奉る。すべての聖者に超えて觀世音を愛する訣は觀世音の腦にはいと尊き如來の光が輝けり、恰も金剛石に日光が反映する様に。また觀世音の胸には如來のいと暖かなる如來の慈愛に満たされたり。而して私を呼ぶに弟よ妹よと私を愛して、同胞として自己の頭の如くに自己の胸の様に私どもの心情を充しめんと思つてゐます。私どもが動もすれば動物類のやうな卑劣な心に陥りて、可憐人生を徒らに肉慾の墓に葬らるゝを願みずして、還つて自ら快と思ふ時には、あなたは遣る瀧なく私の爲に御胸を痛めなされて、私に覺よ醒よ、地球全體よりも貴き生を何ぞ徒らに没し去ると。

人生再び得がたし。御身は如來の使命を以て此世に出しにあらすや。また我が同胞に、三千界の寶よりも尊とき命は永遠の光明にすゝむの生命でないか、汝が汝を忘れ汝自ら棄つる如きは愚な習ひ、我が汝と手を携へて共に光明の道にすゝまんと望め。

吾父の聖意を仰げよ。父は世を照す太陽よりも明かに汝が心を照し慈悲を以て汝をあたゝめ汝が靈きに發達することを何よりか悦び給ふにあらすや。

### 觀世音と菩薩

觀世音を菩薩と云ふ譯は、菩薩とは菩提薩埵と云ふ熟語の略したので、譯すれば覺有情と云ふ。此が二種に分る。

薩埵と云ふことは有情また衆生とて即ち普通の人間また凡夫と云ふことなのである。謂ゆる人類なので常識も發達し人間の道としては履行するものゝいまだ進みて靈の生活などには入らぬもの。佛教にては本來衆生には佛性として佛と成り得らるゝ性能が具してゐる。故に若し佛種縁より起る、聖種を播して之を養ふ時は菩提心と云ふ光明の放つ精神が顯現する様に成る。譬へば凡夫の心はまだ月球の様なもので、月球は本自ら光なけれども太陽の光明が反映する時は日の光が映じて此地球より見れば月自らの光として映射してをる。

此地球より初めて見ゆる緋月から漸次に光が増長して竟には満月となる。

淨界に在ます無量光如來は心靈界の太陽なので衆生の心は本間黒なもので靈界の事は一向わからぬ晦月のやうなものである。

初めて信仰に入りて如來の心光に少しく觸れたる時が即ち信仰の緋月である。此初めて信仰の光明の曙光を認めたる時に自分ながらも非常に歡喜を感ずるときは、きはだちて感じ他人にもまた賞せらるゝ、故に經にも菩薩の初めて發心したる時は他人よりも讚賞せらるゝと。

漸次に進みて満月と爲るやうに菩薩の初發心より圓滿なる佛果に至る迄の階級を五十二位に分ち或は十六分位を立て、ある。

如來の光明を受けてその信念が進むに随つて智慧も感情も意志も心意の闇黒が光明となり、染汚が清淨となり、無明が智となり、罪惡が正善と靈化するそれが菩薩の階級である。釋迦文佛及び一切の諸佛方は何れも皆滿月の如くに智慧も徳も圓滿に成就なされた御方なので觀音勢至文殊等の如きの大菩薩衆は十三四日の月に比し、また各宗の祖師方や宗教界の偉人らは皆十一日の月に類し、初發心の人らは新月に比例せらるべきである。

階級を通じて光明を獲得したる人々は皆菩薩なので云ひ換ふれば觀音の同胞である否活ける觀音である。

地上に生存し肉體を以て血あり肉ありて、而して天の太陽よりも靈なる上界に在す如來を愛慕して止まず。

また上界に在ます獨りのミオヤは大慈愛を以て太陽が肉體に於ける如くに愛を注ぎ給ふて在ます。其愛の光を仰ぎて其父を愛慕して其あたゝかなる愛に充さるゝ者が即ち觀音である。

慈父と觀音との相互の間には間斷なく靈の生命が通つてをる、あたゝかなる愛が往來してをる。

母親の乳房に哺食るゝ赤兒の如くなのである。

### 佛衆生相念

慈愛の深き母の心の内容を解剖して見たならば唯々子を愛念する一念ばかりであらう。また子は餘念なく唯母を憶ふ念ばかりである。若しも之が念寫術で母の心念を寫して見たならば、母の姿はなくて唯可愛い子どもの姿ばかりがあらはれるであらう。

またあどけなき子どもの念を寫したならば唯慕はしき母の面影のみが残るであらう。我等慕はしき如來を憶念したならば我が心が却つて佛のすがたとなる。如來の大圓鏡智の鏡の心には私等がすがたばかりが現はれてをると思ふ。互に相憶ふ間には形と心の影とが互に取かはしてをる。されどもいまだ幼なき兒には母の容姿は寫せどもいまだ深き慈愛の心念は汲取ることとはできぬ。

兩方取かはしてをる内に漸くに同化せられて、つひに強き方が増上縁と爲ると云ふて強きたすけと爲つて弱き方を同化してつひには内容の豊富なる慈愛までが感染するやうになるにいたる。

私どもが如來と只初のほどは慈愛のあらはれるなる愛の權化なる麗はしきみすがた旭の輝く如きみすがたに懐けて愛慕し、また夕日の中にも靈容の輝くを憶はれてえも云はれぬ懐しさを感ぜられる。私どもが夕日かゞやくごとにあなたの慈顔のかゞやくを憶ふときは身心ともに融液してしまふ。

觀音の御頭に慈愛に溢れてをる彌陀の相好の現はれるは此消息を示されたものとおもふ。

精神生活の中には、自己の最も愛する相互の中に、自我を其中に投じ全幅を献げて憶ひ念はるゝ中に、相互間に不可思議の力と生命とが繋ぎ合ふてをる處に精神生活の中心點はなからうか。

宗教心の中心眞髓は彌陀と觀音の相念の神秘不可思議の處に在るのでないか。彌陀と觀音とは密家杯では同體に認めてをる。それは先に述べたる彌陀の心は觀音に入り觀音は一らミダを念じて相互間相交映してをることは、かの念寫術の場合の如くなれば觀音の心念は彌陀なのでミダの念は觀音である。

何人もミダを念じミダを我信念の生命と爲す時は同じく觀音には相違なきも、まだ餘の人は間斷が多い雜念が交ることつよい。觀音の心念は全部彌陀に充されてをる。佛敎にて人間一日の中に八億四千の念ありと、細かな活動である。念が悉くミダの聖

意と契同し、ミダの聖意が自己の身にまで完全に働か爲すものは観音である。他の人と雖もミダの心を我として働かばやはり観音である。

### 観音三十三身示現

普門品に現はれたる観音の三十三身普門示現の相に至つては觀經等に現はれたる觀音とは表面には大いに異なる如く見ゆれども其實は同一である。佛敎の宗教的内容に於ては決して二途ある事なし。法華經に十方佛土中唯有一佛乘無二亦無三、除佛方便説と、宇宙の眞理の歸する處は宇宙中心なる眞理の活ける本尊は唯一である。或は之を無量光如來と云ひ、また大日如來と云ひ、または妙法と名づけたれども、唯有一佛乘我々の宗教より云はば無量光の一佛乘である。三十三身の或は梵天帝釋ともまた國王とも又宰相または王妃等の種々の身を現すれど其内身に離れぬものは其頭に宿れる彌陀、胸に宿れる如來である。若し寶石のやうに輝くミダの光明なく紅蓮花のやうな胸に宿れる如來が無かりせば、たとひ或は梵天帝釋また國王大臣または王公の夫人等の種々の身を現はすけれどもいつでも離れぬものは、  
出づる朝日の中に輝くミダの慈悲の面影想へば靈感極りなかりけり。

### 信と愛と欲

觀音とは如來の光明に満されたる人、而して如來の光明と愛を我有として、此が我が力が爲りて働く、恰も電氣に照され電氣に暖められ其電氣を以て器械を運轉する如くに、眞の宗教心は神の光明に照されて神の聖意を信じ、神の恩寵に温められて我感情も有りたたくも樂しくも平和と靈福とが感じられ、其が電氣力にて器械が運轉する如くに、我身心も如來の靈力に動かされて恩寵に感じて悦んで働かでは居られぬやうになる。それが全く活ける信仰である。

如來は人の靈を養ふミオヤにして衆生は子は子である。ミオヤと子の最も精神的に關係

すべきものが信仰である。之に信と愛と欲との三方面に於て關係す。

如來の心光を眞受けに受けて毫も我有とするのは信心である。信の心理は澄淨忍許として如來の實在と大靈力とを承認して疑ひなき心。

譬へば心の澄淨たる處に日光の影が映現するやうに、信心の水澄む時は如來の光明が映現する故に、衆生信水澄む時は佛日の影映現す。

信心は觀音の頭に彌陀を載せたるのが、即ち信心の表示である。

信と愛と欲とは頭と胸と體の如くである。

信は大腦の中心に如來を奉戴して如來を我がすべてに超えたる絶對的無上の獨尊として歸命信奉する姿である。之が即ち宗教心の根である。

宗教の宗と云ふ字は獨尊統攝歸趣の三義あり。

宗教心が神に信仰心で信仰と宗教心とは同一である。

觀音の頭に彌陀を戴ける、正しく宗教心を表示したものである。故に觀音は彌陀信仰の代表名である。故に此觀音の寶冠の彌陀と信仰を表示することは能く會解がでる。自分も恁の如くの心理状態となれば自分も觀音の分身なので矢張り活ける信仰となつたのである。

宗教と云ふは意味は徳様である。宇宙一切萬物に超えて絶對的に尊い靈格が存在し其尊いと云ふことは天地萬物中如何なる物も比すべき物のなき尊いものである。其尊きもの、存在を信認して自分のすべてを獻げて歸命信賴するのが宗教心である。

もつと委しく宗教の意味を説明すると恁である。宗教は天人合一また神人一致等として、元來人間を小天地と云ふ。此小天地の人間の身體中に四支五官五臟六腑などの數

多の物が集合したる團隊が個人と云ふ一人の人間である。此五尺の體全體が自分であるけれども、此四支五官等が各々眼は視耳は聽舌は食物を消化する如き各々自分の

受持の職能があつてつとめて居る。けれども大腦の中心を都府として居る精神が即ち一身中に王である。四支五官等の一切の物は皆それに屬するものである。そこで

此小天地の心王と大宇宙の大靈の心王との相互直接關係が宗教心である。此小天地中では心王が宗と云ふ最も尊いものである。然れども動物や幼稚なる人間には大脳中に最も尊い心靈の光が活現して來ぬ間は宇宙大靈の尊格を信認することができぬ。視よ牛馬杯には人間の最も尊い處の宇宙唯一の尊格に對してそれを尊信畏敬する如き心は現はれぬ。

### 獨尊

宗の獨尊と云ふは徳である。個人の身體は大脳の自我が尊とく、國に二王なし即ち帝王が一國の尊ときもの、天體には太陽が尊王で尊きものである。

宇宙絶對的に尊き帝王が即ち宗教の尊格即ち神である、またミオヤである。

宇宙の天地萬物は悉く天則に従つて其命令の下に運行しつゝあり。而して北辰の其處に在つて衆星之に拱ふが如くに、天の有ゆる星宿でも一切萬物は悉く天の命令に従はぬ物はない。

天則の帝王、天のミオヤを信じて之に信順するものを信と云ふので、其眞理の存在を認めず動物的に生活するものを無宗教者と云ふ。

### 信は感謝

如來は宇宙の最尊なる光明者にて一切衆生の心靈を照す靈的太陽である。如來は宇宙の最尊である。然るに小宇宙の衆生心に靈性と云ふ尊とき心性の現はれた人には此の尊格の光明を受くる事ができる。

宇宙大靈の光明と人の靈性とは相互に感應すべき性質である。其状態は若し物理的に譬ふれば天に太陽ありて赫々として六合に照輝を放つて居る。地上の金剛石に太陽の光が反映して光を放つてゐる。本より太陽の光は地上萬物の上に照り互りて在れども瓦礫の類には反映が鈍い、こは瓦礫の類は鑛物自己が粗澁なるが故に微妙なる日光

は素披に爲つて之を反映する迄に自己が緻密でない爲である。然るに金剛石また水晶杯が日光の映寫を爲すは自己の質が緻密にしてまた高等であるためである。宗教心理も之と同じく無信仰の心は動物的に劣態である。瓦礫に類すべき状態である。故に最も微妙なる如來の靈的日光の映寫するの性能が缺乏して居る故である。寶石は鑛物中の貴重なる物であるから鑛物の宗教心である。

大靈の光明を仰ぎて益々光明に化せらるゝが故に自己の靈性も益々發揮する。即ち信仰心は如來の光明を仰ぎて進む爲に、客體の如來が益々尊くなる故敬虔の心が益々深厚になる。此敬虔の心が厚くなる程あなた達の靈體が尊く感じらるゝ。

信と念は如來を深く稽首禮拜して至心に敬禮し信念するに隨つて信心の金剛石は益々琢磨せらる。

「金剛石も磨かすば玉の光は添はざらん」人は佛子の靈性を具有する金剛石なれども薩陲の鑛垢に障られて如來の光明の映寫する光が顯れぬ。

故に己の心の染汚無知罪惡の薩陲なるを自覺して眞實心に無上尊たる靈たる如來を仰ぎ造次轉沛にも常に念じて如來の靈光を仰ぎ己を獻げ至誠心を以て己を砕き己が無知罪惡なるを克勵して止まざれば、寶石も推勵琢磨によりて光輝を放つごとくなる。

若し無上の信心敬虔歸命の信念を不斷に拂ふにあらざれば金剛の信心發揮する事なし。

是菩薩薩陲と云ふ凡夫の鑛垢は如來の恩寵に依つて除き聖靈の心は恩寵に靈化せらる。

觀音の大脳の金剛信心に彌陀大靈の分身は常に在ります。我等如來の恩寵によりて琢磨せられし信念の頭には如來常に在りて離れず。

金剛石は日中に受けたる日光を闇夜に吐光す。我等が念々に如來を念じて止まざる時は我等が信心の中に如來の靈光は永へに照し給ふ。是信仰。

### 観音の本尊

宗教とは宇宙唯一の尊き格を信認して之を信順するを旨と爲す。即ち自己の活ける本尊を安置することである。大宇宙の本尊が此小宇宙の人の本尊となる。

大乘佛教の教ふる所は教祖釋尊の精神中にも大なる本尊が安置し給へることは華嚴經に悠う説いてある。

釋尊が六年間入山學道の功果として十二月八日の曉、日が東天に登らんとするに先だちて、無上の正覺を得なされた。正覺とは釋尊の心が無明の闇はれて恰も太陽が出て乾坤全體が明々となりし様に、釋尊の心の夜が明けて絶對なる心靈界が顯はれた而して見るともう今迄見て居つた娑婆世界は消え失せて、宇宙全體が眞實に微妙に光明輝く蓮華藏世界が顯はれた。宇宙大なる大蓮華の上に盧舍那圓滿の相好光明を以て普ねく十方界を照して無量の莊嚴を以て飾られたる淨土に在して法身の佛や菩薩の爲に説法し給ふを見なされた。其時に人佛の釋迦は百億の釋迦と同じく其座に列座して説法を聞くを見給へりと。

して見れば人佛の釋尊にも其心眼の中に常に宇宙唯一の尊き如來を仰ぎつゝ在りなされたのである。

其大靈界の本尊遮滿圓滿の如來とは即ち彌陀無量光如來のことである。故に釋尊と云ふも人間の身を受けたる已上は天上界の尊たる彌陀を信念し給ふことは無量壽經に示されてある。たゞ其が即ちすべて大乘佛教信者の心の本尊である其本尊常に頭上に奉戴することを表示したのが観音の寶冠である。

こは釋尊の御涅槃に臨んで弟子衆に告げなされた。若し如來よ、あなたの御存生中はすべてを御師範として教を受け指導を仰ぎましたが若しアナタが御入滅の後にはドナタを御師範として私共の精神の指導を仰ぎましやうと。其時に釋尊は示し給ふに、我滅後に諸の弟子展轉して之を行せば如來の法身常在して滅せざるなりと。斯釋尊の

御示しが大乘佛教にては明瞭と示しなされて、汝らが信仰心の中に彌陀無量光如來は在まして汝等を指導し給ふと。されば古來文殊普賢と云ふのは大乘の信佛家の代表者である。其の文殊普賢とともに菩薩の總代として憍やうに其志願を告白し給へり。「願くば物我てふ煩惱の命を取りてそれからそれに附屬してをる凡夫の持前なるすべての悪き心を如來の光明に除かれて面あたり阿彌陀如來を見て安樂に心が生れ往りたし」と

宗教の眞理はこゝに存すと信ず。

### 品性

威ありて猛からず實に神聖にして侵すべからざる如き威嚴の中に何とも言はれぬ春日のやうな温なる愛に充されて、狎るべからずして引きつけられる愛情を以て其胸臆中に充滿してゐる愛大慈愛は天地に充ちてをる慈愛。

最も高尚なる權化富嶽のやう崇高なる形に品性の勢力、其清廉にて白蓮の如く高尚、理想と所有する崇高なる徳を備へて而して慈愛に富みまた意志は金剛の如く眞實、あらゆる美徳は観音に顯はれてゐる。

品性は觀音の頭に輝く光よりは響る胸臆に漲ざる處の美徳である。いかなるものも引つけて自然に美化するものは品性である。何人も自ら品性の前には敬服せざるを得ね。品性は菩薩の常恒に蔭の方よりも光の方へ〜と常に向上すべきである。品性を陶冶すべき己が天から受けた材能を成べくつとめてよく出来るだけ好くする。それが菩薩の行である。

眞實に正直に高く〜に進むのである。その義務として己が全力を竭して日常の不斷の如來と離れぬ處に品性は備つて來る。

高い品性は矢張大なる靈に充されたる聖徳が自然に我感情と爲り品性は人格の奥な



る自己の我なれば、日常平生の自己を養ふ處にある。即ちたとひ物質の財は乏しくとも精神に富豊正直で誠忠。

王冠を頂く國王も外に威張りても品性の前には内心に服す。

品性は白蓮の如く清廉潔白に、優美に、正直に、忠實に、正義

知識や藝能また財産美貌等は決して品性を莊嚴するの具ではない。動もすれば却つて傲慢や無禮等のために自分の品性を汚すことがある。富は品性を崇高にするものではない却つて之を腐敗し墮落せしむることあり。富と腐敗又奢侈と惡徳とは互に親密な力をもつてをる。

意志の弱い克己の乏しい制御の悪い情欲を持つ人には富は誘惑また身を危くする陷阱である。

聖ハーンナルト云ふ、私に害を與ふる者はない皆自身です、私を受くる損害は自分が有てゐる、自分より外に眞の害者なし。

品性は刻苦に依る。己を省み己を練り己に克つ修養、現在より高く、刻苦を築ち己を強くす。

偉人の手本偉人の光最高品性の標準に達せんとするが是正當。觀音の最高等標準に達せんと欲す、是正當なる義務。必ず爲すべき標準。精神の富者となす。

### 感 化

信と愛と欲とが必ず我は標準の如く自己を開發支持して向上できると信じ、それに己の靈を愛して而して人生向上の一路に望を以て目的に随つて向上すべきである。人生茫茫として一定目的なき者は向上するを得ず。勇敢に進み精進して忍べば最高の理想に向つて品性を琢磨する。而して高い理想を實現する自己の品性の光は他人にも及ぼす。他の品性の模範を被りて自己の品性を陶冶しました自己が他人に感化を及ぼす

品性の人は敬畏せらる。品性の人は敬虔。古來の偉人聖賢等を恭敬するは個人家庭國民の幸福に缺くべからざるもの、是なき者は神に對して信仰なく人に信用なき時は社會的平和また進歩できぬ。何となれば畏敬は人を互に結び渾べて神に結ばしむ。

品性充實せば他人を引き寄せて感化する。或は同情慈愛を以て彼が悲みを憐み沈めるを揚げ慈善事業の活きたる中心點たり。人格の品性は一種の魔力感化を以て衆人に及ぼす。太閤秀吉が日本名護屋にて薨去を聞いて敵兵の勢力は一時に回復したりと。

大政治家チャタムが大任に命せられて人格感化は役所全部に及ぼされたり。又ネルンが司令官となるや水夫等一時に鼓舞されたりと。名ばかりでも喇叭の如く世を感動させる。

大思想家の獨り退いて考へる所の思想は數百年後も後人の精神に活動す。其思想は次第に世の人に毎日の生活實行に現はるゝに至る。法然親鸞日蓮等の思想は今現に日本に感化を及ぼして居る。

アービングがスコットの棲居に訪ねた時に彼は己の親友近隣の農家日雇人に迄紹介して見せ曰く私は我良好な淳朴な蘇國人に君を見せたと。古人の豪い功蹟高尚なる辛苦の話は今人の心を高め現在の生涯を確む。國民の歴史中榮譽の編は艱難の記録に富む。困難の記憶は國民の品性を造る。

印度の國は亡びたが釋尊の人格の感化は世界に及ぼして現に活きてゐる。希臘は小國雅典の都は小さい。然れども美術に文學に哲學に又愛國心はいよ偉大なり。雅典羅馬は一般に快樂と懶惰に耽りたるために滅亡せしなり。

若き人達は附き合ふ人に眞似すには居られぬ。人は天性眞似すきである。言語態度すべて似て來る。人類はすべてを學ぶ學校である。

長年一つに柄むと次第に類似して彼等と知別できぬ迄になる。朋友を選ばねばならぬ。人は交る友達によりて眞面目な人は醜漢と一緒に居らない都人は鄙人と交らない

放蕩者も交れば遂に墮落す。青年は己より優れたる人と交れば益を受け悪人と交れば有害の果を結ぶ。高尚なる品性の人と棲め、凡庸我慾の人と交れば不活潑なる我慾者となり心力萎微し大道を闊歩する度量なく道義心鈍る。一層賢き経験者と交れば己を鼓舞し興起せしむ。彼は我人生に把持する知識を高尚に彼等が賢智を分與せらる。彼等が苦痛した時を學べば彌々己を助ける。彼等の氣分強ければ自分を助ける。賢明で活潑な人と交れば品性感化せらる。偉い善人を見るに青年の精神を鼓舞する者である佛の文學者シャトウリアンは一度ワシントンを見た計りで一生彼を鼓舞した。ワシントンの顔色のみにて一種の能力がある。

加特力教を信する金貸が特に人を欺んとするや自ら尊信する聖徒の畫像を被布にて覆ひ隠して人を欺いた。ハズリットは曰つた、美婦人の畫像に就いて其面前では醜い仕事は不可能と。獨乙婦人が貧家の壁に懸けたるルーテルの畫像を指して彼の男らしい正直な顔を見ると人を善人にする。

畫像私共を益親しく自己と同情を喚起せしむ其の容貌を見れば見る程恰も彼を益好く知り彼に近親せしむる緣故を有する如くに感ず。私共を一層崇高なる天性と結びつける連鎖である。私共は己の尊敬する偉人の標準に達するは遙に遠きも、或程度まで絶へず畫かれて存する肖像に由つて心を維持せられ強められる。

善良なる人達は自然に敬畏を喚起す。高尚なる品性を敬するは自尊心を高尚にす。大なる思想又は事業を以て名を顯したる人を想へば私共の周圍に清い空氣を創作するやうに感じられる、私共の志操を高尚にす。

他人を尊敬せんとする刺激大なるは品性が形成しつゝある間の青年の時節である。アーノルトは自分の生徒が豪ひ仕事を尊敬し之に向つて熱心に充ちたり。彼曰く私は信ず誰をも尊敬しないと云ふ主義はあれは惡魔の好む文句であると。偉人格に觸れたしとして青年詩人アランは石工の弟子の時に文學者のスコットが街を通るのを見たい目で蘇國のエヂンバロまで長途態々趣けり。狹量の小人は心底から偉大を崇拜できぬ

彼らは偉人の事業と人物とを認めることが出来ぬ。卑劣な人は他人の成功を見また善事を見れば、彼は己に無禮でも加へたやうに思ひ做さんとする。他人の賞められるのを聴いて我慢ができぬ。若し賞められた人が同職でもあれば尚更である。他人を誘り嘲弄し短所を探すに汲々とする。彼等の慰めは品性ある人の過失を見出した時である。ヘルハルトは曰うた、若し賢人過失しないならば愚人は大に困却するだらうと。

賢人は愚人の過失を見る事を避けんとす。英のポリンフロークは頻りに當時の名將マールブローの弱點を語された時に曰つた。彼は餘りに豪い人だから私は其過失を忘れてしまつたと。デモスセネス體格弱く低聲不明音調短呼吸なり。刻苦精勵千挫不撓の決心つひに大雄辯家となつた。品性を模倣して己を陶冶した例は世に澤山あり。或は他人の傳記等を手本としてまた事實に養成せらる。

偉人は國王法王等の尊敬をうく。大美術家ミカエルアンジェロに對して豪家フランシスデメデシスは帽を脱せずして話した事はない。法王ジュリアス三世は高位の僧正十二人起立しアンジェロに席を取つて安樂に座せしめた。皇帝チャールス五世は大畫家チヤンの爲めに道を讓つた。或日其畫家の手より繪筆を落した時自ら腰を曲げて拾いて曰く御前は皇帝によつて給仕せらるゝ價があると。法王レオ十世はラファエルの死せし時寢床に付き添うた。

観音の宇宙觀人生觀

諸曲の江口に性空上人が生身の普賢菩薩を拜み度く念願せしに一日生身の普賢ぼさつを拜み度くば江口の里に往けとの告げを被りて速かに彼處に往きしに、江口の里と云ふは娼樓軒を並べたる花柳町である。娼樓に誘はれて妓女等が種々の肴酒杯を列ねて醜淫なる唄をなす時に上人は恠しと思ひ普賢菩薩は何れに在すと思ひたりしにト自ら覺めたり。己自らの誤である。眞の普賢菩薩を瞻む爲には肉眼にて拜むべきも

のではないと。忽ち瞑想に入つて神を静めて観ずれば今迄娼娘と見しは心眼には生身の普賢菩薩となり六象に乗りて四八相好あでやかに百福莊嚴威神極りなく、即ち微妙の音聲を以て實相の妙音を唱ふことを觀じたりと。

人は肉體は人間である。人間としては現社會は相互に兄弟骨を啖み合ふ競争場裡にいかにも淺ましき世なれども若し心を轉じて自己は彌陀の靈に復活せる觀音となりて觀れば、此自然の世界も悉く蓮華藏世界にて天に羅列せる一切の星宿も皆諸佛の淨刹太陽の六合に照臨するは即ち盧遮那如來の光明遍ねく法界を照して一切衆生を攝化し給ふ(相)である。

蒼海の潮に洗面第一に昇る旭日の妙麗なる、いかにも満面の歡喜を湛へて而して赫々として六合を照すさま是ぞ此の自然界に應現せる無量光如來の化現ならずや。

東天して乾坤を照せば此地上は忽ちに萬物光輝を放ちて四時の佳興を供す。鳥歌ひ花笑ふ何もこれ如來法身の化現ならざるものぞ。

地上に千態萬狀の自然の美、山に海に處として美を表さざるなし。東坡が溪聲廣長舌山色清淨身と賦せしもまた日本の紫( )が法の花( )梅

松櫻當位即妙と詠みしも山河大地いかなる隅々隈々も法身如來藏の現れならざるはなし。

彌陀の智光に覺めたる觀音と成つて此自然界を觀する時は萬物一として彌陀法身の化現ならぬはなしと觀せらる。

### 觀音靈格の要求

觀音は彌陀の靈光に造られたる理想の人格である。若し彌陀なかりせばだうして觀音てふ美しき子ができやう。彌陀の靈力は一切處に徧在して信仰心ある人格を養成することは、喩へば太陽の光に米粟を實らしむる能力ありや否やは太陽の光を見るのみでは證明できぬ。けれども若し田圃に稻種を播く時は萌發し竟に稻實を結ぶ如し。

觀音は一切衆生本如來法身より稟けたる心地あり。彌陀の名號を靈性圓滿なる靈的人格なるを聞いて其の彌陀を信するのが即ち觀音となる聖種子である。常に宇宙の光明なる大慈父なる彌陀を信じ稱念して念々不斷なれば、そが宗教心の素種となりて恰も米の種子を播したる如くである。それからは太陽の光熱によりて萌發し成長する如くに常恒に彌陀の慈悲と智慧との光明によりて養はれ、ますく信心の靈性は増長す。

信は如來を無上の尊敬を以て仰ぐ。また信は佛法の大海には信を能入とし、信はあなたの實在を信じあなたの無上の尊位を信じて至心に尊崇す。而してあなたを神聖視し威神に感じ全力を盡して敬禮す。而してあなたを信する心が益深く感情の底にあなたの慈愛を入れ而してあなたの慈愛に愛育せられたる私たちの靈我は只尊崇して天上のあなたにのみ止ることできずして、この此彼の間の親愛の深き我は全くあなたの有あなたを離れて我は無いと共に、あなたは全く我が有でまします。我はずべてに超えてあなたを愛す。此の兩者の間に靈き血となり暖き呼吸となりて、相互に通ずる處の感情の愛の情緒を以て幾重にも繋ぎ合ふものは愛である。

愛は信の最も眞髓に入りて暖かに血肉の暖かなる生命のかよふ處である。たとひ信すれども愛なくば鳴らぬ銅や鉄の如くで、山を移す程の信ありと雖、若し愛なくば數ふるに足らぬ。信と愛と望との中最も大なるは愛なりとポーロが云へる如く、信は以て無上の尊敬を感ずるも無上の愛を以て親和するにあらざれば未だ眞の眞髓と云ふに足らず。

### 愛の發達の順序

肉の親子の愛情にも生れた計りの子は左程は濃厚でない。哺乳掬育の間に暖まりが深濃になるものである。如來と人との間に於ても亦然り。未だ靈性の眼も(開けぬ)程は如來を慕ふ愛の情はなからう。然るに小兒の泣き聲に母の乳房を與へらる、如く

衆生稱名の聲する處に如來の愛の法乳は受けるる。漸々に靈性が長養するに、つひに母子的の愛の如くに慈悲のミオヤが慕はしく感ぜらる。

我らは初生の赤兒である。大慈愛の懷に抱擁されつゝあるも、まだ慈母の懐かしい面を見るに至らぬ。

ミオヤの慈悲より生じて慈悲に愛養せらるゝ我らの靈性は即ち觀音である。私共は煩惱の淺ましき動物的の人間の性能のみ發達して未だ彌陀の子たる心は增長せぬ。さればミオヤを左迄に懐かしく感じない。靈の乳をさもおいしいとは思はない。稚兒が母の笑顔を見て喜び飛びつくばかりに母の懷にだきつくほどに、ミオヤを常にしたひてミオヤの胸に抱きつかうとはせぬ。

けれども愛慕の情が自己の心中より衝き出で、最善至美なる最高者に觸れんと欲して益高きに慄れ親まんとの情は禁じえぬ。

觀音の奥底に輝ける不思議の光は靈なり。其血は愛なり。その靈の生命、それが彌陀と互に血を通はしてゐる。

如來と衆生とは本内心の性には親子的の靈性は伏在すれどもされども現在の處では全く其性情を異にして居る。いかにとなれば如來は絶待無限、有らゆる美妙の性なので、衆生は無明闇罪惡なので反對な性情である。故に若し只現在肉の我の人ならば永久に親密の關係は逆も望むべきでない。然れども内面に伏せる觀音の性が親の慈愛に養はれて漸々に發達し增長して（はじめて親和の情おこる。）

生物は原始生物などは雌雄二個に分れて居らぬ。然れども少し進んで本一體から進んで來ると雌雄兩性が各形體を二つに分れて各自性を別々に備へて居る。此の兩個は柔剛陰陽の如く相反對なる性情でありながら、其の反せる異性を愛する性能を有つてゐる。反對なる性の合一する處に造化の妙用がある。

太陽が自體より地球と云ふものを分婉して、吾より引き離して或適度のむかうにありて、而して常に其地球に常恒に熱烈なる愛を注いでゐる。地球は太陽の愛を受けて

四時行はれ百物成る。春は花咲き夏は繁茂し秋は果實りて常に造化の作用を爲してゐる。

太陽と地球とは其性質は反對即ち異性である。然れども太陽は敢て飽くまでも地球を愛して永久に離すことは出來ぬ引力を以て吸集しやうとしてゐる。地球も離れんとしながら永遠に離ること出來ぬ。日々太陽の熱烈なる愛をうくればこそ萬物光榮である。

彌陀と觀音の關係もまた然うである。

世の子女たるものまだ處女時期は世に親ほど親愛なるものはなき故に、いかなる胸中の秘密をも母に依つて解決を乞うて運命を開くの鍵は母の預る處である。然れども漸く成長して稍獨立せんとする季節になると自己の生理的に發動する衝動として感情に發し出づる情は母を離れて獨り異性を要求する。そはすべての生物の性情である。植物などでも異性の交渉を求むる自然の作用は春風和氣に催ふされて爛漫たる色に鬱郁たる香氣を放ちて雌性より分泌する花粉は雌藥の子房に入らんとす。すべての生物に此造化の妙用は同じ。

靈性に於ても衆生と其異れる如來との相互の間に於ても此の親和愛慕して交渉を遂げんとする妙用なくんばあるべからず。これぞ衆生が如來を愛慕し一心に佛を見んと欲して自から身命を惜まざるに至る所以である。

宗教は靈の生活である。

すべての生活は初め小兒が母に育てられて、成年期に達すればまた自ら家庭を造りて子女を養育す。肉の家庭に於ても異性相扶けて成立する如く夫婦親和し獨身生活は不自然である。

心靈の生活もまた然り。弱き無明の我等にはまた其反對なる光明善美有らゆる靈徳圓滿なる神性の偶者を求めねばならぬ。是私共の異性なる如來は圓滿完全なる靈聖態として應身を使はして常に我と共にあつて常に我を助く。

肉體が相愛する異性を以て其愛する物と同様し其の愛する異性を我有としてそれと同様しそれと生命を共に爲んことを望む。靈性に於ても亦然り。靈性は靈格なる如來を愛して夫に生命をも献げて我はあなたの有、あなたは我が有である一體不可離の關係を得ずば止まぬ情を起す。これ即ち靈の戀なり。靈性が神即ち如來を憐るゝ靈より衝動する高等なる感情である。肉體は兩方の愛を合體して新らしき生命なる子を産む如く、靈性は如來の靈應に感觸し神秘冥合の妙用によりて靈き生命たる聖子が生ず。

これ観音と彌陀との親密なる關係にして深遠微妙不可思議なる感情、宗教的天才の胸中に熱烈に湧き出る靈相である。

觀音は己が靈き生命の緒を彌陀の愛に結び日々何度となく念の緒にくりかへし／＼結びて繋ぎ合はうて永遠に斷つことなき愛の情の糸である。而して我は無上の最高者と結びて永遠に割なき仲となることを生命とす。如來は智慧慈悲威神等の萬徳、悉く完備し毫も缺點なし。怒る靈格が無上の愛を以て我を愛し給ふと思へば、我らは全生命を献げて彼に容れられんことを樂ふ。此の相互の靈的結婚は永久に離婚の患なき約束なり。彼は何時も我爲に隨好に娛樂を與ふ。彼は無盡の持參金を以て我に格れり。我が無限の心靈上の幸福は悉く彼が齎らし來れる寶なり。我憤る時彼は無量の愛を以て我を宥め我悶ゆる時彼は無限の德音を以て我を慰藉す。また我ら日々の業務には偉大なる力を與へ弱き我に強き力を加ふ。我は現在を通して永遠にまで最高者を離れざることを無上の光榮とす。

### 如來は愛の現はれ

宗教に盛に稱ふる處の神は、或は神は無形の神靈にてまた超人格であると云ふ流義もあれども、それは哲學流の宗教觀にしてまだ眞善美妙の宗教觀と云ふに足らず。然しながら深遠不可思議なる大神靈態は無相即相、相即無相と佛教に云ふ。

なれども大靈態は大心靈的大圓鏡である。この大圓鏡に向へば自己の信念に相應し

て佛身は顯現す。

如來は大慈愛から衆生の爲に現はれたる靈的人格である。

人同志も相愛する人に向ふ時は其愛情の表現として麗はしき顔を以て現はる。如來が衆生を深く愛し給ふ慈愛からして最妙最美の相好と現はれしことを（察しらるゝ）

いかにとなれば如來は本法身大智慧の相形を超えたる靈態なれども、衆生を愛する慈愛の表情として無比靈妙なる色身最美麗なる尊嚴なる相好を以て衆生に臨み給ふ經に如來に八萬四千の相好乃至無量の光明を以て遍く十方を照し念佛衆生を攝取して捨て給はずと。實に如來は滿天滿地の愛を以て衆生を抱擁して離し給はず。悉く無上の愛なる如來が滿天の慈悲を以て我を愛し給ふに、我争でが愛慕せざらん。如來の麗はしき相好は衆生を愛し給ふ心の表はれとは何を以てか知る。經に佛身を觀るものは佛心を見る。佛心とは大慈悲是なりと。怒く靈妙なる相好を以て我らを挑發し給ふ。これを想へば我らはいよ／＼戀念して止まざるなり。

### 如來は愛慕するものに現はる

如來の生命は大慈悲である。大慈愛を以て生命とする如來が此の可愛い衆生を捨て遙か十萬億土に安んじて居らるべき。實に常恒に影の形に隨ふ如くに我らを隨逐して離れ給はぬ。常に此に在して離れ給はぬ。

其故は彌陀が生身を以て示現したる釋尊が出世の本懷たる法華經に我等を愛し給ふ慈愛の秘密を洩らし給へり。即ち壽量品が其消息である。私は壽量品ほど宗教的感情の如來が衆生を愛しなざる真理を示しなされたものはないと信す。

其大意を演べんか、如來は慈も可愛い、汝を捨て争でか遠き／＼處に安んじて居られやう。常恒に此土に在つて常に汝等を愛護して居る。

『我は久遠却より已來汝ら衆生を我が中に入らしめんとて汝等を教化して佛道を得れば我と共に在ることを得。故に無量劫來汝等を度せんか爲に方便して涅槃を現すれど

も實には滅せず。常に此に住して説法す。我は常に住すれども神通力を以て顛倒の衆生をして近くはあれども見ざらしむ。其所以は宗教の真味と云ふものは感情の奥底に潜んで居る處の或るものが動き出したる心でなくては實には真味がない。還つて此肉體を見れば肉眼を以て見ゆる者が如來なりと想うて眞の如來を見ることができぬ。故に我は此の肉體の滅度して隱るゝものは眞實永遠の靈の如來の眞實妙色身を以て汝らに見えんが爲なり。それについては、汝らは至誠心に我を戀慕を懐き渴仰心を生じ正直にして柔軟に、一心に佛を見んと欲して自から身命を惜まざれば、我は衆僧とともに靈山に現はれて、汝等に我が常住不滅身を以て汝に説法す。實に然り。いかに如來の慈悲なるも、衆生の浮薄の心を以て如來に接すれば、如來の靈たるも自から感ずる能はず、容易に見ること能はず。難値難遇。身命を顧みず眞實心の奥底に、また無量の煩悶深重の懊惱苦心慘膽百練千鍛の後に於て、如來の妙色身を瞻み妙法を聞いて悟道も得べけれ。故に容易に見えざる所に還つて如來の深遠なる眞意が感じらる。凡夫が己が脆弱の心を以て佛を永に見うるならば、還つて憍恣心を生じて放逸にして惡道の中に墮せん。

大正十五年十月廿八日印刷

同 三十一日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)

年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成

發行人

東京市小石川區荻荷谷町九八

印刷人 小林 七太郎

發行所

東京市小石川區水道二ノ四四

ミオヤのひかり社

振替東京六八五一番